

第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

名称	第11期宇治市生涯学習審議会 第3回審議会						
日時	令和5年10月12日(木) 午前10時～12時						
場所	宇治市生涯学習センター2階 一般研修室(一部オンラインによる開催)						
出席者	委員	×	内田 徹	○	鳶 繁行	○	林 みその
		○	切明 友子	○	杉岡 秀紀	×	堀井 聡
		○	桑原 千幸	×	長積 仁	○	向山 ひろ子
		○	小宮山 恭子	○	中本 裕也	○	森川 知史
		○	佐藤 翔	○	西山 正一		
	事務局・市教委職員	○	木上 晴之(教育長)				
		○	福井 康晴(教育部長)				
		○	上道 貴志(教育部副部長)				
		○	林口 泰之(教育支援センター長)				
		○	堀江 紀子(教育支援課長)				
		○	前田 紘子(生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	野口 雅史(生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹(兼)生涯学習係長)				
		○	松田 輝子(生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	木口 悠(生涯学習課生涯学習係主任)				
○	八木 美穂(生涯学習課生涯学習係主任)						
傍聴者	1名						

会議要旨は、下記のとおりである。

• 第2回審議会の会議録について

修正がないことを確認し、ホームページで公開する。→委員了承

1. 教育長挨拶

2. 報告事項

➢ 第33回紫式部文学賞受賞作品・市民文化賞受賞作品について

(事務局)

紫式部文学賞・市民文化賞は、宇治市のふるさと創生事業として市民のアイディアから誕生し、平成2年に創設された。

紫式部文学賞は、伝統ある日本女性文学の継承・発展と市民文化の向上に資することを目的としている。対象作品は作者が女性で前年に発表された文学作品であり、全国の作家・文芸評論家・出版社・新聞社や市民から推薦された作品の中から選考される。今年度は門野栄子氏の「イコ トラベリング 1948-」が選ばれた。

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

紫式部市民文化賞は、文化的伝統の継承発展を図り、市民文化の向上に資することを目的としている。市民による作品であれば、文学以外にも歴史民俗等の研究作品も対象となり、作者の性別も問わない。今年度、市民文化賞として2作品、奨励賞として2作品、また作者が30歳未満のユース賞として1作品が選ばれている。受賞者の中には宇治鳳凰大学卒業生や、過去の生涯学習センター主催事業修了生が集まって発足したグループも含まれている。

贈呈式は11月18日に宇治文化センターで行われるので、お時間があればご出席いただきたい。

### ➤ 令和5年度近畿地区社会教育研究大会〔滋賀大会〕について

(事務局)

9月8日(金)立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて令和5年度近畿地区社会教育研究大会〔滋賀大会〕が開催された。全体会では「ここでともにぶじに生きる」と題し、滋賀県立大学地域共生センター特任講師の上田 洋平氏による記念講演があった。また、分科会では、「学校・地域の連携・協働」「地域づくり」「青少年教育」「家庭教育支援」「人権教育」の5つに分かれ、各テーマについて報告・討議した。当審議会からは小宮山委員、西山委員、向山委員、森川委員と、分科会のみ長積委員にご参加いただいた。

(委員長)

当日ご参加いただいた方から感想をお聞かせいただきたい。

(委員)

滋賀県の方は言葉を大切にしている印象がある。前回大会では三日月知事が挨拶で話された「人は人の中で人になる」という言葉が印象的だったが、今回も良い言葉が多く出た。記念講演の上田先生は言葉を面白く使われる方で、たくさんのキーワードがあったが、中でもビジネスに相對する言葉として「ビジネス」という、ここでともに無事に生きていることを確認し合うことが大切だという話をされた。漫談のように分かりやすく、非常に引き込まれた。

分科会では、和歌山市における大学生と地域が連携した地域づくり、空き家活用による居場所づくりと商店街活性化の取組を聞いた。地域に密着した大学で、ゼミの形式で空き家活用や商店街活性化に取り組んでいる。学生の考えは幅広く、大人では思いつかない内容も多いが、それを大人も受け入れる事でうまく居場所づくりができていると思う。いつでも誰かがいて話ができ、子どもが来たら何か始まる場所を作ることができたのは、危機感と改善の気持ちの強さによるものだと思う。学生がまた行きたい、またこの人に会いたいと思うような、出会いを作る場所を宇治市でも作れたら良いと思った。

(委員)

記念講演は本当に楽しい話で引き込まれた。分科会は「学校・地域の連携・協働」に参

加した。大学がどのように地域に貢献しているかという長岡京市の話だったが、地域内でのリカレント教育と人脈づくりの重要性を力説しておられた。宇治市でも京都文教大学のサテライトキャンパスで様々な催し等が行われているが、長岡京市でも同様の取組がされており、今後さらに日常的に、大学として地域と連携した学び直しの機会の創出と同時に、地域もそれを受け入れていくことが大事と強調されていた。

(委員)

分科会では青少年教育の今と未来の社会教育について話を聞いた。兵庫県の野外活動団体の発表だったが、自然体験活動を通じた青少年育成に取り組んでおられ、小学生から40歳位までの社会人が活動されているとのことだった。今進めているのが野外活動にファミリーを巻き込み、保護者にもがんばってもらうキャンプで、一緒に育っていく取組とのことだった。子どもや若者の声を聞くこと、その声を聞ける人を育てること、若者の声をひろって大人に繋げること、それらができる「質が良い大人」というキーワードが印象的だった。場所がないというが、例えば図書館も人が集まる場所である。中学校の部活にもキャンプを取り入れ、地域と一緒に何かを行って子どもたちの選択肢を広げるのも一つである。自身も地域でコミュニティ・スクールにも携わっているので、そこで出会う大人は質が良いと言われるように尽力したい。

(委員)

記念講演の上田先生は、大学の特任講師という肩書きの他、まちづくりのホームドクターや社会教育委員、各種コーディネーターやファシリテーターなど、10個もの肩書きが記載されており、さらに日本青年会議所の人間力大賞を受賞されていて、一体何者なのだろうと思っていた。講演開始後10分程度、プロジェクターが映らないトラブルが起きたが、焦ることもなくそのまま講演を進めていかれ、只者ではない姿に衝撃を受けた。

講演の中心は、現在のような効率一辺倒の考え方を改めるべきとの主張だったと思う。場があつて、そこで様々なことが行われていくことが重要であり、効率を追わず、自身の見返りは求めずに、皆で議論しながら自分が受けてきたものを皆に還元していく姿勢で関わるのが最も大切だと話されていた。上田先生は人と関わり、人を関わらせていく日頃の活動を中心に、自分の生活を営んでおられる方だと思う。生涯学習審議会で議論すべきことは、我々が今後どのように生きるべきか、そのためにどのような場づくりをしたら良いか、ということだと考えさせられた。

(委員長)

それぞれの講演・分科会のお話を伺うと、これから協議する生涯学習のあり方について非常に示唆があつたと思うので、後ほどの議論で活かしていただきたい。

### 3. 協議事項

(事務局)

今回の審議会では、前回に続いて生涯学習関連事業評価についてご意見を賜ったのち、主に生涯学習のあり方についてご協議をお願いしたいと考えている。

➤ 令和4年度生涯学習関連事業評価について

(事務局)

事業評価については、前回までに担当課に評価の意義が伝わっていないことや、定量的な評価が含まれていないといった評価全体に対するご意見を頂いている。次年度に向けて事業評価のあり方を見直し、改善して取り組みたいと考えている。その他にご質問やご意見があればお願いしたい。

(委員)

評価のあり方については前回発言したので、またご検討いただければと思う。今回は2点提案したい。1点目に、事業評価は様々な部署にまたがっているため、評価の仕組みや重要性、具体的な記載事項等について、事前に関係部署に向けて研修を行った上で評価表に記入してもらうようにすると良いと思う。研修となると人事の部署との調整も必要となるかもしれないが、その辺りも含めて総合調整が必要になってくる。

2点目に、評価結果を踏まえて、理事者と協議できる場を作ることが必要だと思う。教育委員会の独立性があるとは言え、市長部局にもまたがった評価であることや、予算編成権があるのは市長部局であることから市長・副市長も含めてフリーディスカッションできれば良い。審議会で多くの意見やアイデアが出ると思うが、内部資料や審議会資料として公表するだけでなく直接理事者に伝えることで、何のための評価かが伝わり、改善につながりやすくなると思う。

(事務局)

事前研修については、文書等での連絡はするものの対面で意思の統一をるところまでは至っていなかった。研修という形で行えるかは分からないが、生涯学習課として考えていることが伝えられる場を設けられるよう検討したい。

2点目についてはもう少しスケールが大きい話となるが、おっしゃる通り最終的には理事者の判断が必要となる事案もある。今回評価について様々な課題をいただいたので、次年度以降、改善したものをまずは教育長と協議するが、今後市長部局と連携するにあたり、どのように審議会の意見を反映できるか、長いスパンで検討していきたい。非常に大きなご意見をいただいたと思う。

(委員)

他の自治体での実施例もある。検討していただきたい。

(委員長)

多くの部署を集めての事前研修となると大変だろうが、手始めに5分位の動画を作って

見ていただくだけでも、文章だけの説明より伝わりやすいと思う。思いを伝える方法をいろいろと試していただければと思う。

自己評価について様々なご意見・ご質問をいただいた。まずは審議会で自己評価を点検することが第一歩だと思うので、引き続き事務局で検討して次年度以降に活かしていただきたい。

### ➤ 生涯学習のあり方について

(事務局)

まず、先月行われた「中宇治地域市民協働でつくるまちづくりの拠点ワークショップ」について簡単に報告する。

9月2日の事前勉強会では、公共R不動産の菊地氏から公共施設更新をめぐって国内の多くの自治体が抱える課題について解説があった。公共R不動産は、自治体の物件を使ってほしいニーズと民間の公共施設を使いたいニーズをつなぐ会社で、菊地氏は前職の日本政策投資銀行で老朽化公共施設再生のコンサルティングを担当されていた。

事例紹介として、岩手県紫波町のオガールプロジェクトが紹介された。公共連携エージェント方式で行われたプロジェクトで、公共施設をつくる4つのステップ、方針策定⇒設計⇒施工⇒運営のうち、方針策定から民間が主体となる方式とのことである。

講師のレクチャーの後は、市民協働推進課より中宇治地域で行ってきた「子育てにやさしいまち実現プロジェクト」が紹介された。子育て世代に優しいまちは全世代に優しいまちだとの考えから「まちのリビング創出促進事業」を現在も行っており、「場所」を起点に多様な「きっかけ・つながり」が生まれて広がることを目指し、それぞれの「やりたいこと」を形にできるようにしていきたいと述べた。

鼎談では講師と職員に、中宇治地域の住民である建築家の方が加わり、3人とも子育て中であるという観点から話が始まった。観光地であり、暮らしの場である中宇治地域のまちづくりについて語られた。

最後に参加者が菟道ふれあいセンターと旧宇治公民館跡地を含む中宇治のまちを歩いた。

9月24日には1回目のワークショップが開催され、株式会社ここにあるの藤本氏から、自身に関わる尼崎市でのまちづくりプロジェクトについてレクチャーがあった。元々はNPOに就職して別の市のまちづくりに関わっておられたが、地元である尼崎に関わりたいと独立された。

お寺でカレーを食べたら面白そうと知り合いの住職と「カレー寺」を始めたところ、人気イベントになった。お寺の檀家には「仏教もカレーも同じインドがルーツ」「ルーツであるインドの文化に触れるイベント」と説明したそうだ。

様々なプロジェクトを手掛ける中、障害者が参加していないことに気付き、市の福祉イベントを見学。1980年代から続くイベントだが、参加者の固定化や高齢化に悩んでいることが分かり、障害がある人もない人も楽しめるフェスにしようと「ミーツ・ザ・福祉」というイベントに変革した事例も紹介された。

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

現在の世の中には「お客さん」が増えている気がする。それは寂しいことではないかと最後に参加者に向かって問いかけをされた。

講師の話の後に開催されたワークショップでは、学生、子育て・働き手世代、高齢者に分かれて「誰が」「いつ」「何を」活動できたらいいかを班ごとに話し合った。次回以降のワークショップではまた異なる班組をする予定とのことである。

各班から出た活動のアイディアは資料の裏面にまとめられているのでご覧いただきたい。

(委員)

ワークショップ参加人数が気になる。中宇治地域の取組は市全体にも関わる話だと思うため、定員があるのであればこのような取組が数多くあることが望ましいが、今回は参加人数の想定はどのくらいだったのか。

(事務局)

定員を設定したのが市民協働推進課のため人数設定についての答えは持ち合わせていないが、事前勉強会に参加した人のなかから、ワークショップに3回とも参加できる方という条件は設定されていた。

(委員)

とても良い取組だと思うため、開催を知らなかった市民がいるともったいない。多く機会を設けて今回参加できなかった市民の声も拾えるようにできたら良いと思う。

(委員長)

話を聞いていてワークショップに途中から参加することができないと分かったが、他の意見が反映されないのは非常にもったいないと思った。

(事務局)

同じだけの情報量を得た者同士で議論してほしいという思いから、このような整理になっている。

(委員)

このチラシを見て興味を持つ人もいるかもしれない。簡単に切り捨てられて良いものかと思う。

(事務局)

見学は誰でも可能と聞いている。

(委員)

現在小倉駅前でもまちづくりの取組が進められているが、拠点づくりも今後中宇治地域

から全市的に波及されていくものなのか。

（事務局）

市民協働参画の視点からまちづくりを進めていくことが大切だというスタンスで取り組んでいる。現在は中宇治地域と近鉄小倉駅周辺を中心にまちづくりのためのワークショップなどを開催しているが、今後も様々な拠点で事業を進めるにあたり、市民と一緒に考えられる機会を設けていくことが基本的な考えであり、他の地域にも広がっていくことになると思う。

（委員）

その際は市民への周知もお願いしたい。

（委員）

パブリックコメントやこのような催しは、市政だより等で広く募集すべきである。広報した上で参加しないのは個人の自由だが、一部の意見だけで終わることがないようにしてほしい。以前に公民館のあり方を検討した際のパブリックコメントでは、非常に多くの意見が寄せられた。公共施設を作る・なくすということには市民は敏感に感じている。反対者の意見も必要だが、声なき声を聞くことも必要となる。この審議会のように各種団体や各方面からの意見を出し合える場を設けて進めていけたら良いと思う。

（事務局）

今回のワークショップについても、市政だよりや市ホームページ等でも告知し、できる限り市の広報手段を使用して周知させていただいているが、そもそも市政だより等をご覧いただけていないという課題もある。SNS を利用した広報も行っているが、今回の取組に限らず事業等の広報においても、多くの方に周知できるよう努めたい。

（委員）

生涯学習審議会委員を長く務めているため、今回のワークショップの内容もすぐ理解できるが、一般市民が見た時、市が何をしたいと考えているか理解できないのではないか。歴史的にまちを動かしていた集まりが現在どうなっているか、現在まちに関わる人々がどのような活動を行っているか、といった根本的な部分から解き起こさなければ、多くの市民を巻き込んでまちづくりをすることはできない。以前から生涯学習審議会は何をしているかという話が出るが、我々が重要だからと推進していることが一般市民には伝わっていないということである。宇治だと観光地としてどうすればよいかは常々議論され、商売につなげたい人々は一生懸命方策を考えるとと思うが、今回のまちづくりは性質が異なる。市民として豊かに暮らしていくために宇治市をどうしていけば良いかを考えなければならない旨をまず伝えなければ、何がしたいのか不明という印象しか与えないと思う。

(委員長)

そもそも生涯学習や地方自治に全く興味のない市民が大勢いて、そのような人々には情報が届きもしないという根本的なご意見だと思う。

(事務局)

今回、通常なかなか意見を聞く機会のなかった学生世代や、公民館や図書館といった社会教育施設を利用されている高齢者など、様々な考えを持った方が参加されている。確かにその場にいる人にしか伝わっていないかもしれないが、事前勉強会においても、これまで市が実施してきたまちづくりについては説明している。通常の公募だと、平日の日中に時間のある年齢の高い方にしか参加してもらえないが、今回は年代も偏りが少なくなるように調整され、これまでにない形で市民の意見を聞ける機会を工夫し開催している。

(委員長)

今回のワークショップに限らず、当審議会においても興味のある人にだけ伝わるのではなく、あらゆる世代の市民を巻き込んでいけるよう考えなければならないと感じた。

(委員)

現在はNPOなど問題意識をもって市民として関わる方も増えている一方で、関わりたくない方、例えば自治会やPTAなど何らかの役が回ってくると避ける方が圧倒的に多い。自分が快適に暮らすためには、応分の関わりを持つことも必要だという意識に変革していかなければ、一向に伝わらないだろうと思う。

(委員)

ワークショップに25名参加され6班に分けられていると思うが、人数は均等に分けられていたのか。また、事前勉強会もワークショップも土日に設定されているが、なぜ平日の開催がないのか教えてほしい。

(事務局)

ワークショップについては、定員30名を超えたため年齢や性別を考慮して選考されている。欠席者もいたため4人になった班もあったが、もとは5人ずつ均等に班分けされており、概ね同人数で議論できるように構成されていた。また、今回は「活動」を考えるとというテーマだったため、年齢構成も似通った方で班を作ったと聞いている。

土日の開催としたのは、学生や子育て世代、サラリーマン世代の方にも参加いただきやすいように設定したと聞いている。

(委員)

実際に子育て世代が土日に参加しやすいかというと、逆に学校に行っていたり預けていたりする時間帯の方が良いのではないかという印象を持った。



## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

委員の皆さんに伺いたいですが、今回のワークショップへの参加者の募集の記事は市政だよりの8月1日号に掲載されていたが、どれほど認識されていたか知りたい。

(委員長) ※宇治市民の委員のうち、知っていた委員が挙手  
関心の強い当審議会の委員の中では、8割程度が知っていた状況のようである。

(委員)

自身は補助金等様々な情報が得られるので市政だよりはよく読むが、一般的にはどうなのかと疑問に思ったため質問した。意識の高い委員の中でも全然読まれていない状況だと広報手段を改めるべきだと思ったが、個人的にはご存知の方が多くて良かった。

(委員)

事前にどこかの団体に声かけはしていたのか。写真を見ると校長先生もおられるので気になった。

(事務局)

おそらくと思う。校長先生は学校がある地域の話だから個人的に参加したと聞いた。本当に関心がある方が参加しているのだと思う。

(委員)

事前の声かけがあり、広報の仕方に偏りがあれば問題があると思い発言した。

(委員)

募集時の案内を見ていると保育ありとなっていたが、実際の利用はあったのか。

(事務局)

生涯学習課では把握していない。

(委員)

もし保育を依頼して参加されている人がいれば、平日開催でなくても子育て世代の参加ニーズをカバーできると思う。

本当に声かけもなく、これほど学生が集まるものなのか。参加してほしい方に声をかけたのではないか。

(委員長)

主催者側が積極的に声をかけたわけではなく、この分野に関心のある先生が学生に情報提供をしたのではないかと予想される。

(委員)

日頃から市民活動をしている学生はいる。

(委員)

どれだけ一般市民に情報が届いているかも気になるが、関心のない方はそもそも情報をキャッチする姿勢がないと思う。上手くまちづくりができていないから拠点をつくるのだとすると、拠点が軌道に乗るまでは関心のない方には情報が届かない状況が続く。ワークショップは広く市民の意見を吸い上げるよりも、そこに暮らす人々目線でのアイデア出しが重視される場であり、基本的には良い取組だと思う。

(委員長)

今回の参加者がどのような経緯で参加したのか、純粋に関心を持った一般市民なのか地域や分野に精通した市民なのかなど、報告書だけでは読み取れない部分も多いが、各参加者の感想なども知ることができれば、関心のない市民にどれだけ伝えられるかという部分での参考にもなると思う。

(委員)

中宇治地域という冠がついているため、市政だよりを見ていたとしても自分たちの地域には関係ないと思う方も多いと推察している。また、中宇治地域は商業地でもあるため、商店街ですでに取り組んでいるため、わざわざ他の活動まで手を出さなくてもと考える人もいると思う。今回のワークショップは小規模ではあるが、他の地域にも波及する良いきっかけになると思う。

(委員長)

初めての取組であるため、やってみないと分からないだろう。広報手段についても今後の課題はあるが、この審議会に出た様々な意見が伝えられたら良いと思う。

(委員)

中宇治と書かれているが、中宇治の住民はどの程度参加されたのか。地域で一生を送られるような純粋な中宇治地域の参加者がいなかった場合、勝手に地域のまちづくりの話をされても困るのではないかと思う。

(事務局)

把握していない。募集要項には、応募多数の場合、分野や年齢層等から選考すると記載されていたが、地域の属性まで勘案したかは分からない。

(委員)

今後も同様の取組を続けていくのであれば、現在まちづくり活動されている人にも参加

## 第11期宇治市生涯学習審議会 会議録

してもらわなくて良いのか。例えば青年会議所や商店街、自治会、PTA、NPO など、それぞれの立場で課題を抱え、向き合っ取り組んでおられるはずである。地域で行われている活動内容を知らない者だけで話をするのは問題があるのではないか。良い取組だと思いが、もっと広く知恵や経験が聞ける体制が必要だと思う。

(事務局)

市民協働推進課で以前から開催している事業も中宇治地域で取り組んでいるため、日頃から商店街等にもご協力いただき、コミュニケーションを取っていると思う。

(委員)

議論をするにあたり、地域に関わっている人がいるかどうかで方向性が変わる。多方面の意見を聞くためといって、あえてこれまで参画していなかった方の意見をピックアップする必要はないと思う。せっかく議論の場が設けられたのだから、もっと話が膨らむ場に来たほうが良いのではないか。

(委員)

市の都市計画マスタープランでは地域別構想があり、それぞれの地域で計画が推し進められているが、ワークショップで計画と異なる意見が出たら反映させるのか気になった。もちろん市民の意見を聞くことは大切だが、市として大きなビジョンを持って推進していることと整合性が取れなければ軋轢が生じる。生涯学習にとどまらず市全体の施策に関わるため審議会で答えを出せることではないが、今後ワークショップを進めるにしても、その点も意識した方が良いように感じた。

(委員)

学生も多く参加しているようだが、高校生には学校を通して情報が入っているのか。せっかく良い機会が設けられているのだから、今後地域で生活していく子どもたちの意見を聞ける機会があれば良いと思う。

(事務局)

学校に対して特別に広報をしたかどうかは把握していない。高校生も一般の方と同様に広報をご覧になり、関心を持って参加されたのだと思う。小中学生については、宇治学などまちについて勉強する時間があるため、調べ学習等を通じて意見を出して、発表する機会があると思う。

(委員長)

当審議会ではワークショップの情報も踏まえたうえで、生涯学習のあり方について大局的のところから意見をまとめていきたいと考えている。

(事務局)

資料には、改めて第8期答申で示した生涯学習のビジョンを掲載している。今回は事業など活動についてご意見をいただきたい。

まず、「あらゆる年代の市民を、市の生涯学習推進に巻き込んでいく仕組みを構築する」ことについて、例を挙げている。先ほどの事前勉強会の報告の中で、市民協働推進課の取組についても報告したが、その一環で開催されている「中宇治エリアまちにわワークショップ」は子育て世代が来場しやすい土日の日中に行われている。また、男女共同参画課の事業では、会場での参加とオンライン配信での参加を選択できる事業がある。

舞鶴市の多世代交流施設まなびあむでは、社会人向けの講座を平日夜間や休日に開催し、欠席者用にアーカイブ配信も行っている。まなびあむでは、全世代の市民に利用してもらいたいということで、市民が市民に伝えたいメッセージを募って展示などもされている。また、那覇市の公民館の事例だが、移動式屋台型公民館として、生活圏内に施設がない地域に職員が出向いてまなびを提供する「パーラー公民館」は生涯学習のアウトリーチと言えると思う。

このように実施日時や参加手段の多様化、社会教育施設を飛び出して事業を行うことで、これまで生涯学習になじみがなかった市民を巻き込むことができるのではないかと事務局では考え、実際に今年度は生涯学習センターの事業で土曜の午後に会場参加とオンライン配信を同時に行う講座を企画している。

次に、「活動が、教育の範疇にとどまらず、他の分野と連携することで、各々が専門性を活かしながら、新しい取組が生まれるのではないか。つまり、生涯学習に関する施設・仕組み・組織・事業等を総合化していくことで、世代を超えた地域交流の促進や、市民によるまちの活性化につながるような生涯学習が推進できるものとなる」についても、いくつかの例を挙げている。

事業評価でも見ていただいたように、生涯学習課以外の課でも生涯学習事業は行われており、生涯学習センターや公民館以外の公共施設で学習活動を展開されている方も多い。また、民間事業者でも事業に関連する分野で市民に向けて学習機会を提供しておられる事例がある。

市民が健康維持のために健康づくり推進課や長寿生きがい課が行う体操教室に参加すること、字を美しく書けるようになりたいとコミセンの書道サークルに参加すること、これらは学習者の立場から見て、生涯学習を実践していると言える。

市の福祉部局が市民に健康を維持してほしいと考えて体操教室を開催すること、電子機器開発会社が今の時代にはプログラミングの知識を学ぶことが必要だと考えて、市民向けに教室を開設すること、これらは学んでほしいことを明確な意図をもって学習者に働きかけていく、社会教育と言えると思う。

このように、現在でも「あらゆる年代の市民を巻き込む」「教育の範疇にとどまらない」生涯学習は行われているが、さらに発展させるために、紹介した事例なども踏まえて、改めて今後の宇治市の生涯学習のあり方についてご協議いただきたい。

(委員)

人材バンクに登録しているが、図書館から防災をテーマに講演を頼まれた。図書館では防災に関する本を展示し、危機管理課ではゲームなどをして、コラボレーションすることでおもしろい催しになった。また、今週末には槇島町の体育振興会と健康づくり推進課がコラボして、スポーツイベントと血管年齢測定を行うイベントを開催する予定である。最近では団体戦より個人でスポーツを楽しむ傾向にあることから、従来の町民運動会の形式から変え、開催時間帯に自由に来てもらうイベントを試みることにした。今後このようなコラボレーションが増えていくと良いと思う。

(委員)

コロナによる社会情勢の変化が大きく、第8期の答申時には想定できなかった体験もしてきた。あらゆる世代の市民を巻き込むとのことだが、巻き込み方が従来とは変わってくることも踏まえて検討する必要があると思う。また、横の繋がりは作ろうと思えば徐々に広がっていくと思うが、世代を超えた縦の繋がり作りに対しては相当な尽力が必要となるため、そこを重視して全体像を検討する必要があると思う。

(事務局)

非常に大きな課題である。ワークショップでもこの後は世代をシャッフルして班組みをすると聞いている。生涯学習センターの事業でも、イベントなら比較的様々な世代に集ってもらえるが、講座では世代によって関心が異なることもあり、世代を超えて集う難しさを常々職員も感じている。審議会でもご協議いただき、ご助言いただきたい部分でもある。

(委員長)

まさしくその辺りの難しい問題について当審議会でも議論を深めたいところである。

(委員)

先ほど委員から他部署と連携した事例の話があったが、全て一人で動かれているのか。

(委員)

最初は市から直接講演を頼まれただけだった。せっかくの機会だからとそこから他部署にも話が広がっていった。

(委員)

人脈がある人はピンポイントで話を受けても他に繋がられるだろうが、一般市民ではなかなかそこまで発展させられない。生涯学習課が窓口となって他部署との連携をコーディネートできれば、個人の負担も減りうまく回るのではないか。自身が住む地域では今年運動会の話はなかったが、この間コロナで中止したことに乗じて今後なくなる方向ではないかと推測している。何か理由をつけて繋がりたい人もいるだろうし、窓口を一本化して相

談できるようになれば市民としては嬉しい。

(委員長)

何かで連携したいと思っても上手くできる人ばかりではない。生涯学習の窓口を作ってコーディネートしてもらえればとのご提案だったと思う。

(事務局)

宇治市では各課で出前講座を持っている。他市では、一つの窓口課があり、そこから各課に派遣を依頼する仕組みをとっている例もある。他課との調整が必要になるため時間がかかるかもしれないが、いただいた意見を反映できないか考えたい。新しい生涯学習推進手段の一つになると思う。

(委員)

固く考えなくても、仲人のように繋ぐ窓口というだけで良い。派遣依頼はするが、その先の詳しい内容までは踏み込まずにそこは他課にお任せすれば良いと思う。

(委員)

兵庫県神戸市では「つなぐ課」がある。あえて所管業務を持たず、他課を繋ぐことだけをミッションにしている。宇治市でも応用できるエッセンスがあるのではないか。

兵庫県明石市では、ファシリテーション専門職員の募集があった。市民と市役所を繋ぐだけでなく、市役所内部も繋げていく役割を担い、ファシリテーターを外部委託せず内部の職員で賄うことでノウハウを持った人材を蓄積していつている。最近顧問弁護士を外注せずに内部に採用する自治体が増えてきているが、同じような発想で、内部でファシリテーターを育成するには相応の仕掛けが必要である。宇治市でもニーズはあると思うので、教育委員会から始めてみてはどうか。

あらゆる世代の方に参加いただくためのヒントは、公民館よりも図書館にあるのではないかと思う。ただ指定管理すれば良い、来館者が増えれば良い、費用が減れば良いという考えだけで進めてはならない。単に複合施設を作れば良いという単純な発想ではなく、複合化した中で上手く運営されている事例を学ぶ機会があれば良いのではないか。図書館から生涯学習の仕組みを学んでみるのはどうかと思っている。市内に3つの図書館があるが、せっかく中宇治で施設を建てるのであれば、図書機能をどうするかということも含めて一度議論してみてはどうか。

(委員)

今まさに指定管理者制度を導入している図書館について、各自治体が募集要項でどのようなことを求めているかを調べている。学校図書館を利用する10代20代だけは別として、公立図書館は幼い子どもから高齢者まで幅広く利用する稀有な空間である。一方で、従来の図書館では世代を超えた交流があまりできず、各自用件を済ませて帰ることが多い。図

書館の強みを活かして生涯学習の様々な活動につなげ、地域のコミュニティを活性化させる機能を図書館も担えるのではないかと、各自治体も考え始めており事例も出てきている。宇治で新しく図書館を作ることは難しいが、新しく拠点をつくるにあたって一部機能を持たせられないか、それにより図書館の持つ強みを活かしつつ生涯学習やまちづくりに活かさないかというのは面白い観点だと思う。ワークショップの中でも私設図書館や日替わり本屋の事例が紹介されていたが、一種の自己表現であると同時に、本を介して人と人を繋げることになると思う。今ある図書館に組み込むのか、他の施設に機能を持たせて総合化していくのかというのは、近年図書館界でも今後の方向性として注目されていることであり、生涯学習の取組とも大きくコラボレーションできる部分だと思う。

(委員長)

図書館は単なる公共施設ではなく、第3の場としてあらゆる属性の人が集まる場だと言われているため、非常に良い題材となると思う。事例を紹介いただく機会も設けられればと思うので事務局とも相談したい。

今回はワークショップをきっかけとして様々な意見を頂戴したが、あらゆる世代を巻き込むことや行政の横の繋がりなどについて、非常に良い意見が出てきた。次回以降も引き続き審議するので、ご意見をお願いしたい。

#### 4. その他

##### ➤ 令和5年度京都府社会教育研究大会について

(事務局)

11月21日(火)13時半～16時半、向日市永守重信市民会館にて令和5年度京都府社会教育研究大会が開催される。委員の皆様には先週出欠確認のメールをお送りしているが、本日が回答期限となっているので、まだご回答いただいていない方は、会議終了後事務局までお知らせいただきたい。

##### ➤ 次回審議会の日程について

(事務局)

次回審議会については12月頃を予定しているが、後日日程調整をさせていただく。

##### • 最後に

(委員長職務代理)

ワークショップを見学した人がいたからこそ、議論が活発になったと思う。残り2回も関心があれば見学していただくと、議論がしやすくなると思う。

例年2月のまなびんぐフェスタに審議会として出展しているが、今年度はどうするか相談したい。個人的には、生涯学習とは何かといった絵本を作れたらと思っている。各委員や教育委員会との擦り合わせも必要となり準備期間がいるため、実際に出展するなら再来年になると思うが、今回どうするかも含めてメールでご意見を伺いたいと思う。